

紫の上の人間像について

— 第一部から第二部への変貌をめぐって —

武 原 弘

一

光源氏をめぐる女性の中で、紫の上は理想的な女性であると、一般に論評されている。紫式部日記中に、藤原公任が式部に向つて、「あなかしこ。このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」と呼びかけた、有名な叙述がある。「わかむらさき」が、「若紫」なのか、「我が紫」なのかの問題はさておくとして、右に続く本文が、「源氏に似るべき人も見え給はぬに、かのうへはまいていかでかものし給はむ」となっているので、少くとも、源氏物語は「薄雲」巻以降相当数の巻まで書き進められ、公表されていたものらしい。紫の上の理想性が強調されるのは、第二部の「若菜」上・下巻あたりであるとの見解に従つて、この物語中の紫の上の人間像を式部のそれに重ねて見ることもできそうであるが、要するに、平安朝当時の読者にとつても、紫の上の理想的な女性像としてのイメージは、確固たるものであったらしい。

ところで、紫の上を理想的な女性と見る通説に対して、かつて松尾藤氏は精密な作品分析を通しての強い反論をなされた。第一部における紫の上は「性格的にも行動的にも描かれ足りてゐない」し、

紫の上の人間像について — 第一部から第二部への変貌をめぐって —

「自己に何等の反省をなし得ない低劣な女」であるが、「若菜」巻以後の紫の上は急変して、「今や全く理想的な女」になっていると論及され、そのような紫の上の人間像の変貌の由因を、「作者が年令を加へて宗教に対する心の眼が広く深く明けられた」ため、と説明された。

また、この松尾氏説をふまえて、秋山虔氏は登場の初期からの紫の上の人間像をさらに精確に分析・検討され、当初から理想の女性たべく措定された紫の上であるが故に、その人間像が空疎に、あるいは類型的にしか描かれ得なかつたことを論証され、さらに物語が推移展開する過程において見られる紫の上像の変貌とその意味について、斬新な紫の上論を展開された。いま、その詳しい紹介は省かせていただくが、氏の所論の要点として、紫の上の変貌ははやく、「薄雲」巻や「櫃」巻において生起し、それらの節目で提起された主題は、第二部「若菜」巻に直接的につながっていくものであること、そのような紫の上像の変質ないし変貌の由来するところ、作者による物語世界における紫の上の存在意義の問い直し、あるいはその位置の据え直しがなされている、という要約は許されるであらう。

う。

ほかにも、紫の上の人間像の変貌の問題や、「壺」巻と「若菜」巻との主題的連関性の問題は、多くの先学の紫の上論にとりあげられているが、いまはいちいちの引照を省かせていただいて、私自身の当面している問題へ進みたい。

松尾氏が論ぜられたように、第一部における紫の上の人間像は、確かにその造型において、豊かな形象を得ていない点があり、理想的な女性と評するに若干の問題性もある。が、第二部における紫の上はよく描かれているのである。その変貌が、いつ（どの巻）からどのような意味をもって進行したのかという問題は、当然、紫の上論の要点に位置せしめられるであろう。紫の上の理想性とは、端的に、嫉妬の抑制を中核とするすぐれた人格性をさしているが、そのような紫の上像の造型を、作者はどのように主題化し、構想化していったのか。紫の上が長篇源氏物語の女主人公として造型されているときの作者の方法を再吟味すると共に、それが、第一部から第二部にかけてどのように変化しているか。また、作者はなぜそのような方法の転換を敢行したのか。先学の諸論に学びながら、物語本文の分析を通して、紫の上像の再把握を試みたい。

二

紫の上の初登場を描く「若紫」巻には、長篇源氏物語の女主人公としての紫の上造型をもくろむ作者の理念や方法の基軸が、すでに示されていると見てよい。

この巻は、主人公光源氏がわらわ病み療養のため北山に赴いて、

ゆくりなくも、可憐な美少女を発見するというストーリーで始ま

る。「ねびゆかむさま、ゆかしき人かな」（若紫）と思つてさらに見入れば、少女は「かぎりなう、心を盡くし聞ゆる人」（同）―藤壺によく似ている。素姓を聞いてみると、彼女は藤壺の姪に当る人であった。母は故按察大納言の娘ですでに世になく、父兵部卿の宮（藤壺の兄）からも冷遇せられ、祖母の尼君に育てられている。その尼君もやがて他界し、源氏はますます愛しく思つて、強引に少女を自邸に引き取り、「人の程も、あてにをかしう、中／＼のさかしら心なく、うち語らひて、心のまゝに、をしへ生ほし立て、見ばや」（同）と思ひながら養育する。若紫もしいだいなつて、やがて源氏と起臥を共にするようになるというのが、この巻の終結である。

この巻における作者の主眼は、純情無垢な若紫の初々しい美質を描く点におかれていたわけであろうし、物語描写を辿れば、作者のその目的は十分に達せられていることが理解できる。

ところで、紫の上の生い立ちや境遇を、上述したように当初から設定した作者の周到な用意に、私は注意したい。すなわち、紫の上が、源氏の永遠の恋人藤壺の姪に当ること、出自は皇孫であつて高貴が、父宮の庇護も十分に受けていない孤独な境遇にあること、などの情況設定は、紫の上が藤壺の形代として源氏に愛され、にもかかわらず、必ずしも後見の強固でないところからくる身分の不安定さがこれから先もついてまわるであろうことなどの、後の紫の上物語の基軸を形成するものだからである。言い換えれば、紫の上は、この巻ですでに光源氏の嫡妻たるべく、しかしその身分・地位の不安定に悩むであろう、これからの運命を擘づけられている。

源氏と若紫の出会いを語るこの巻の半ばに、藤壺と源氏との密通、つづいて懷妊のことが描かれているが、しばしば指摘されるように、それはいかにも唐突であるし、主題のつながりから見ても不整合の感を否めない。が、源氏の若紫に対する愛情の基底が、藤壺への止みがたい恋慕の情に通じていること——つまり、若紫が藤壺の形代であることの物語的確定の手法として、この条を見ることも可能であろう。藤壺の懷妊は、作者が長篇源氏物語をなしていく上での最も重要な用意から描かれたものであることは確実で、その情況設定の作業はいま始まったばかりであるが、若紫もまた、まぎれもなく長篇構想の基幹部の中に組み込まれていると見るべきである。これより後の「紅葉賀」巻でも、内に秘めた情念につき動かされるように、源氏は藤壺の里を訪問するが、その前後に若紫の清純な美しさが描かれ、藤壺と若紫の一体化描写が進行している。物語の進展に應じて鮮明になるのは、源氏と藤壺の密会がさらに危険かつ困難になる情況の深化であり、それは源氏の若紫に対する愛情の深化過程と全き対応をなして描かれている。例えば、やがて藤壺が源氏の子を産むと、世間は皇子の誕生を喜び騒ぐが、源氏はひそかに藤壺との再度の密会を思つて命婦を責める。命婦がそれを拒絶し、源氏の努力も空しいものとなったとき、「つくぐ」と臥したるにも、やるかたなき心ちすれば、例の、なぐさめには、にしの対にぞ、渡り給ふ」(紅葉賀)という描写がなされる。日一日と大人っぽく成長し、それでいて少女らしい可憐な愛らしさを失わない若紫を見て、源氏は心苦しいまでの愛を覚え、慰むのである。例文を引くまでもなく、このような描写は、若紫がひつきょう紫(藤壺)の

ゆかりの人であり、また長篇源氏物語の重要な女性人物であること、暗示している。

「若紫」巻における紫の上造型のいまひとつの要因として、私は明石入道の娘(後の明石の上)との關係を描定した長篇構想の軸を重視したい。この巻の始発に近い条で、北山から眺望される美しい風景を病身の慰みとする源氏に、供人は明石の海岸の景勝を語つて聞かせるついでに、その地に住む風変りな新発意とそのいつき娘の話を、源氏の耳に入れる。この話は、この巻の主題とも思われる少女若紫出現の物語の中では、単なる一挿話に過ぎないかに見えるので、後の「明石」巻から本格化する明石の上物語との構想上の関連が疑問視され、そのような長篇構想による伏線描写とするには否定的な見解がなされている。人物の年立を換するに、「若紫」巻での明石の娘の年令は九才となるが、本文に「代々」の国の司など⁽⁶⁾からの求婚話が寄せられている旨の叙述があり、不自然だとされている。しかし、明石入道はもともと大臣の子孫で、近衛府の中將にも任ぜられた中央の上流貴族出身で、その高い出自に対する誇りが、国司風情の求婚者を退けさせたのであるが、逆の見方をすれば、国司たちの求婚のねらいも入道の家系にあったとも思えるので、出世栄達の足がかりとして政略的に画策されがらだった当時の貴族界での結婚の実態からすれば、当の娘の年令はそれほど問題にならなかつたと推測することもできるのである。さらに、いささか細部にこだわつて言えば、「代々」の叙述が必ずしも八年前までの年月を逆算する根拠ともならないし、あるいは国司親子が共に求婚した場合も含み得る。事実、時の播磨の守の子良清も、その娘に言い寄つ

ている。いずれにしても、求婚の対象として、娘の年令は確かに低すぎるのであるが、求婚が全くあり得ないと考える根拠も、薄弱である。阿部秋生氏のように、明石の上の年令を三、四年引き下げて考へる可能性もあるのであるから、この部分で娘の年令を厳密に考へ過ぎるのはむしろ問題であろう。すでに、大朝雄二氏も説かれたように、若紫と明石の上がほぼ近い年令にあつたことを読みとるだけで、じゅうぶんなのではないか。作者は、「若紫」巻において、すでに「明石」巻以後への構想を定着化しようとしていたと、私も考へたい。

供人が明石入道とその娘の話をしたとき、源氏は「さて、その女は」と、ただならない興味関心を示している。これに続く場面でも、十才ばかりの美少女若紫の登場が描かれる。明石入道の娘と若紫とは、少くとも源氏の意識において、密接な関連をもつて出現したことになる。出自や身分はかなり異つてはいるが、ほぼ同年令の二人の若い女性を登場させて、両者を、ますます旺盛にはたらく源氏の好色心の射程内に置き、その後の展開を見ようとするのが作者のここでの意図なのであろう。さらに言えば、作者は両女性を併行的に登場させることによって、「明石」巻以降の諸巻(「薄雲」、「松風」、「薄雲」)に及ぶ、光源氏をめぐる明石の上と紫の上との三角関係の物語展開を構想し、描写しはじめていたのである。明石の上との関係の中で、紫の上を嫉妬物語の女主人公に仕立てていくという構想が紫の上造型のもうひとつの基軸となつてはいるゆえんなのである。明石の上が本格的に登場する「明石」巻以降の物語を、上述の視点からいささか追跡してみる。思いがけない須磨流論事件で、源氏

は生涯最大の危機に直面するが、宿世の糸にあやつられて、須磨から明石へ逃がれたとき、彼は明石の上と出会い、やがて契りを結ぶことになる。それにつけても、源氏の思いは最愛の妻紫の上及び、「二条の君、風のつてにも、もり聞き給はむ事は、戯にても、心のへだて有けると、思ひうとまれたてまつらんは、心ぐるしう(中略)人の有様を見給ふにつけても、恋しきの慰む方なければ、(下略)」「(明石)と、源氏は二人の女性に心を分けて苦しんでいる。その告白の手紙を受けた紫の上は、やはり、「おいらかなるものからたゞならずかすめ給へる」(同)返事を寄こしている。月日の経過につれて、その地での源氏と明石の上との愛は深まり、他方では遠い都にいる紫の上に対する源氏の恋情も募る。両女性への深まる愛情にわれと苦しむ源氏の内面の葛藤を叙したのち、作者は、「いかなるべき御さまどもになん」(明石)という草子地文を付しているのが、私には興味深い。この草子地文について、多くの注解書は源氏と紫の上の二人の今後のなりゆきを意味すると解しているが、吉沢義則氏の「対校源氏物語新釈」には、「紫上明石上の源氏に対する将来はどうなるのだらう」という注記が施してある。「御さま」の「御」は源氏と紫の上に対する敬語で、明石の上には、前後で敬語が用いられていないから、諸注が正しいとも考えられるが、源氏がいま心を悩ませているのは明石の上を含めた愛情関係であることは明白だから、これら三者の関係の将来について、作者が読者に興味をつなごうとする草子地の詞であると解するのが、私には妥当と思われる。この草子地文に続く本文は、「年変りぬ」と叙せられ、源氏召還のことを描く。作者は、はやくも二条院での源氏と紫の上

の再会の場面を描写するが、源氏は、別れ来た明石の上のことも気がかりで、紫の上に胸中の苦しさを告白する。対する紫の上は、「たゞならずや、みたてまつり給ふらん、わざとならず、身をば思はずなど、ほのめかし給ふ」(同)のである。あからさまにはないが、紫の上は嫉妬する。その様子が源氏に「をかしう、らうたう」見えるのは、源氏が理想的な女性に育て上げてきた最愛の女の所作だからであろうか。ともあれ、紫の上の嫉妬物語の始発と見てよからう。

やがて、「濡標」巻に至って、明石の姫君の誕生が描かれ、「松風」巻における明石母子の上洛のことが描かれる物語展開によって、紫の上の嫉妬物語はいよいよ本格化する、という趣向である。このような物語の展開を辿りながら、紫の上が長篇構想のもとで書きつながら嫉妬物語の女主人公としての人物像を確定し、あるいは変貌していくありさまについては、さらに次節以下でも分析と考察を加えることにして、私は本節の要点を整理しておきたい。

「若紫」巻には、紫の上造型のために、二つの基軸が設定されている。その一は、藤壺の形代としての紫の上像造型のためのものであり、他の一は明石の上との、源氏をめぐっての三角関係における嫉妬物語の主人公としての紫の上像造型のためのものである。しかも両者は相互に併行したり、交叉したりしながら、長篇源氏物語の基本構想を形成するものである。皇孫の出自に生まれながらも逆境に育っていた美少女若紫が、源氏の永遠の恋人藤壺の形代として絶対的な愛を受けて幸福の道をのぼり進みながらも、源氏の色好みの世界の中に身をおいて、身分の不安定さはつきまとい、明石の上をはじめとする多くの愛の競争者に対抗して生きてゆかねばならない宿

紫の上の人間像について — 第一部から第二部への変貌をめぐって —

命を背負っていたことを、物語作者は長大な構想のもとに始めたのであって、「若紫」巻がその起点なのである。⁸⁰

三

「若紫」巻で、伏線として描写された明石の上が、紫の上と源氏の間になされた緊張関係をもたらすという形で物語の前面にクローズ・アップされるのは、端的に言えば、「濡標」巻からである。帰京後の源氏は、冷泉帝の即位を背にして輝やかしい榮達の道を歩みはじめることになり、彼の正室である紫の上の地位も確固たるものになりつつある。そうした繁栄の途上にある夫婦の間に、明石の姫君誕生が告げられ、明石の上の心を分ける源氏に対する紫の上の嫉妬がはじまるという物語の展開の裡に、紫の上の人間像の造型が具体化していくのである。いわゆる嫉妬物語における女主人公としての形象化が進むのである。「もの憎みは、いつ習ふべきにか」(濡標)という自嘲のポーズのかけに、「すさびにても、心をわけ給ひけむよ」(同)と、紫の上は嫉妬心を抑えかね、明石の上が秀でたと聞いている箏の琴を源氏にすすめられたときには、さすがに堪えかねたのか、紫の上は手さえ触れようとしなかった。そうした紫の上の嫉妬のさまを、源氏は「中々愛敬づきて、(中略)をかしう、見所あり」(同)と見ている。嫉妬するときでさえ「おほどかに、美しうたをやぎ給へる」紫の上は、源氏はいっその美しき、愛らしきを覚えるのである。これらの描写は、紫の上の美貌と好ましい人柄とを強調するほかのものでもなからうが、他方において、紫の上の嫉妬が、源氏と明石の上との関係を破壊するほど激烈な

ものでないこと、つまりは、紫の上の嫉妬さえも源氏の色好みの世界内で許容され、是認されるものであることを、示唆しているとも見なされよう。もともと、源氏を中にした紫の上と明石の上の對抗関係が激しい確執へと発展することを、作者は用意周到に封鎖してしまっている。皇孫の出自にある紫の上と一介の田舎受領の娘としての身分しかもたない明石の上とは、激しい緊張関係は設定されにくいし、明石の上の人柄を謙虚で思慮の深い人間像として描いたのも、紫の上との確執をさげようとする作者の意図に基くものなのであろう。

にもかかわらず、作者は明石の上の存在を核心として、紫の上の内界に広がる不安と嫉妬の情念を執拗に追求するかのごとくである。出自・身分がいかに勝つていようと、明石の上の存在が身近になればなるほど、不安と嫉妬の思いが紫の上を揺さぶり続ける。やがて明石の上の上落が決定し、大井の山荘に迎えられた明石の上に、源氏は深い情愛を注ぐようになると、「なずらひならぬほどを、おぼしくらぶるも、わるきわぎなめり。我は我と、思ひなし給へ」(松風)という源氏の慰めのことばも、紫の上の心底に宿る不安を解消するに、なんの力ももたない。紫の上は、源氏と明石の上の情交を、見て見ぬ素振りですごしているが、内心ではつらい思いを堪えているのである。結局、明石の上の産んだ源氏の娘を紫の上の養女として引き取ろうとの源氏の提案は、生来子ども好きな性格の紫の上に聞き入れられて、当面の破局は避けられた。

物語の作者は、明石の上の登場による源氏をめぐる三角関係の設定を通して、紫の上に揺さぶりをかけたのである。理想的な主

人公の理想的な配偶者たるべく規定されて登場した紫の上は、当然それに勝利した。「薄雲」巻において、彼女に「上」の尊称が用いられるはじめののも、勝者としての彼女の地位をあらためて強調する作者の意図によっているのであろう。以後、源氏の正室としての紫の上の座はゆるぐことなく、ますます確固たるものとして定位する。しかし、それは紫の上の強固な意志による自己抑制と心の広さ、また聡明な深慮遠謀なくしては、達成されなかったのである。のみならず、それはまた光源氏にも高価な代償を強いるほどの重大性をもつものでもあった。すなわち、源氏の嫡妻として、また明石の姫君の養母として、紫の上が幸福な女主人公の地位を確定するに至るのと対応して、継起的に物語られるのは、葵の上や藤壺の他界のことである。源氏の今日の世界を根底から支えてきたこの二人の死は、彼にとつて悲歎のきわみであった。特に、藤壺の死を境に、源氏をとりまく政治的現実も色好みの世界も、大きく転換しはじめており、紫の上にとつて隠然たるライバルであった前齋宮梅壺への源氏の懸想が、源氏自身の深い反省によって「罪深きかた」と断罪され、彼の心に出家の思いがよぎる。このような源氏の心理や行動はまさしく彼の間接的変貌を意味するのであるが、それと紫の上像の変質や地位の安定は、密接につながっているものなのである。⁶¹⁾

作者は次いで、「朝顔」巻において、紫の上に再び揺さぶりをかける。明石の上との均衡関係が実現した直後、代つて朝顔の前齋院に對する源氏の情愛が再燃し、紫の上にもまたも大きな不安と憂愁をもたらした。明石の上とは格段に高貴な出自・身分の朝顔に、女五の宮をはじめ、世人もことごとく源氏との結婚を好ましく思い、是認

している。二人の結婚が成立すれば、紫の上の存在は、たちまちに
てし無きに等しいものに押しやられてしまうのだ。「かゝりける事
もありける世を、うらなく過ごしてけるよと、思ひ續けて、臥し給
へり。(中略)まことに、離れまきり給はばと、しのびあへず思さる」
〔朝顔〕——紫の上の不安は深刻であった。例によって、源氏はこ
とば多い慰めを与えるが、所詮は彼のあやにくの色好みの巧みなご
まかしに過ぎないものであることを、紫の上は熟知している。終局
は、朝顔の頑強な拒絶によって源氏の意思は遮断され、紫の上の地
位も安泰を得ることで、この危機も無事に終わるが、この巻の物語
は前後の文脈の中で、かなり唐突な描き方になっており、問題を含
んでいる。

諸家の指摘にあるように、朝顔の再登場によつてもたらされる紫
の上の苦悩と不安は、後の「若菜」巻における女三の宮の降嫁事件
をめぐって深刻化する紫の上の悲劇へと確実にひき継がれていく主
題なのではあろう。が、私は「朝顔」巻の主題を、むしろ先行の「薄
標」巻、あるいは「薄雲」巻などとのつながりの中で読みとりたい
気がする。すなわち、明石の上との確執を克服して、徐々に、しか
し確実に源氏の嫡妻としての地位を確定していった紫の上の繁栄の
物語圏内に、この巻も入れて見ていいのではないかと。換言すれば、
明石の上をひとつの対極として主題化し、構想化した紫の上の嫉妬
物語の延長線上に、「朝顔」巻を置いて見たいのである。藤壺の死
を描いた「薄雲」巻以降、源氏の色好みの世界がひとつの転換の相
を示しはじめていることは前述したが、源氏と紫の上を理想的な一
対の主筆者とすることを主軸にして、源氏をめぐる他のすべての女

紫の上の人間像について — 第一部から第二部への変貌をめぐって —

性たちとの恋愛関係が、それぞれの形で展開の相を見せながらも、収
息に向けて秩序立てられ、位置づけ直されているように、私には読
みとられる。例えば、「朝顔」巻に、雪が高く降り積もった夕方、
雪まろばしに興じる女房たちに見とれながら、源氏がこれまでにか
渉のあった女性——藤壺、朝顔、朧月夜、明石の上、花散里など
についての人物批評を紫の上に語り聞かせる場面がある。つまりは紫
の上の美質をきわだたせるための描写にほかならないものではある
が、藤壺の他界に伴って、多くの女性たちが源氏の意識の中で過去
の世界へと遠のいていきつつあるのであって、朝顔もその中の一人
として再登場したに過ぎない。彼女と源氏の関係が、後の物語で新
たな展開を見せることはないし、この巻に続く「乙女」巻で、源氏
の六条院造営の企画のことが描かれるのも、私以上に述べたことと
密接な関連をもっている。物語は、玉壺物語などの中篇物語を併合
しながらも、源氏と紫の上の理想の一对を頂点として栄える六条院
の世界を最大限に美化しながら、「藤裏葉」の大団円へと収斂して
いく。六条院における紫の上は、「生ける佛の御園」(初音)に「
うちとけて、やすらかに住みなし給」(同)う、徳倅に満たされた
女王である。このような紫の上の姿こそ、作者がはやく「若菜」巻
で企図し、造型し続けてきた理想の女主人公紫の上像の総体を示す
ものなのである。

思うに、栄華と幸福の頂点に達する紫の上の運命は、彼女が藤壺
の形代として登場した当初から、ほとんど予定調和的に進行してき
ていたとも言えるのであって、そのような紫の上造型法は、古代物語
の人物造型法として常套的なものと評し得るが、その過程において

明石の上との關係をその代表的な事例と見ることができるよう、紫の上はけつして單純には理想化されなかつたのである。紫の上の嫉妬や懷疑、悲歎や憂悶の物語は、形代物語の方法による人物造型の枠を逸脱しかねない固有の視座から領導された、源氏物語に新たな人間造型法の有効な証左である。物語の中でも、紫の上は源氏の絶対的な愛を受け、嫡妻としての地位も不安に思う理由はないのだと、たびたび源氏から教えられている。にもかかわらず、紫の上の不安や嫉妬は、いかんともし難く彼女の内界を動揺させ続けた。それは、ひとりの女性として、また人間として偽ることも無視することもできない内面の眞実なのだ、と作者は言いたげである。つまり、紫の上の出自がいかに高貴であろうとも、彼女の身分・地位がいかに安定しようとも、それらを超えてもつと切実に求められ、確かめられるべき人間の愛と眞実の問題が、紫の上造型のいまひとつの主題としてふまえられているのである。

愛が、それを追求する人間の身分・地位などの社会的制約を破り、あるいは超えて、人間としての眞実へと高まる姿は、この物語でさまざまな人物や事件を通して一貫して追求された主題であるとも言えるのだが、紫の上に賦与された人間性にも、そうした主題が試みられており、彼女を中心とする嫉妬物語も、そういう視座から把握されるべきものなのであろう。

しかしながら、このような人間性探求の主題と方法とは、古代物語的手法が支配的な第一部においては、必ずしもじゅうぶんには徹底しなかつた。物語の主人公である光源氏、女主人公である紫の上が、外面的な輪郭としては理想的人物として型取られながら、内面

的な意味では非個性的で実体が薄いと評されやすいのも、そのためである。作者による人間の内面性追求の視座が確かな深まりを見せるのは、第二部の「若菜」上巻からである。

四

「若菜」上巻以降の紫の上像は変貌している、としばしば指摘される。紫の上はどのように、なぜ変貌したのか。また、それは作者のいかなる意図を示唆するものなのか。紫の上の嫉妬の情念を中核にして、彼女の人間像をさらに分析してみたい。

女三の宮の降嫁は、紫の上に烈しい衝撃を与えた。朱雀院の懇請によるやむをえない結婚であることの、事理を分けての源氏の釈明に、紫の上は事態を平静に受けとめたが、表面とはうらはらに、その内界には底知れない不安と苦悩が刻まれた。「今は、さりともとのみ、我身を思ひあがり、うらなくて過しける世の、人笑はれならん事」(若菜上)を思ひ続け、ひとり悲歎の涙にくれる紫の上である。

目にちかくうつればかはる世の中を

ゆく末とほく頼みけるかな

年若い新妻の寝所へ赴く夫の衣服に香をたきしめながら、対詠とも独詠ともつかない、孤独なスタイルで詠出される右の歌には、紫の上の痛切な歎きがこめられている。しかし、思慮深い紫の上は、強い意志で嫉妬の情念を抑制し、源氏に対しては怨み言さえ口にしなない。孤閨の涙で濡れた袖も、源氏の前では恥ずかしそうにおし隠す。そうした紫の上を見て、源氏は以前にもまして愛しく思い、「一夜のほど、あしたの間も、恋しく、おぼつかなく、いとどしき御

心ざしのまさる」(同) ようになる。紫の上はいっそう美しく、「あるべきかぎり、気高う、はつかしげに整ひたるに添ひて、はなやかに今めかしく匂ひ、なまめきたるさま」のかをりも、とり集めてたきさかりに、見え給ふ」(同) ので、源氏は女三の宮との結婚を後悔することさえあるが、いまとなつては双方に愛を分けて、關係を円満に続けていくことに努めている。かくて、女三の宮の降嫁によつて投ぜられた波紋も収まり、六条院は以前の平和と繁栄を保持しているかに見えた。しかし、「若菜」下巻に入つて、作者は六条院の内部崩壊をドラマチックに描くのである。

紫の上の自己抑制によつて、六条院は、表面上平穏であつたが、彼女の内界に宿つた不安と苦惱は、止む時もなく進昂していた。年令も低く人柄も幼稚だつた女三の宮も、月日の経つにつれて成長し、源氏が宮のもとに通う夜もしだいに増して、紫の上と等しくなつてきた。「あまり年積もりなば、その御心ばへも、つひに衰へなん」(若菜下)と思ふ紫の上の心に、出家への願望がわく。華やかな女樂の宴も紫の上の悲愁を消すものではなかつた。「物はかなき身には、過ぎにたる、よその思えはあらめど、心に堪へぬ物嘆かしさのみ、うち添ふや、(中略)まめやかに、いと行くさき少なき心ちするを、(中略)さきかゝも聞ゆる事、許かで御許しあらば」(若菜下)との志願を、源氏は許さない。その夜、紫の上はにわかに発病し、日に添えて弱りゆく。折しも、女三の宮と柏木との密通事件が惹起したのである。以下、物語本文を引くことは割愛するが、六条院の人々は、おのおのが深い罪と傷を負いながら、悲劇的生をつき進み、紫の上と柏木の死、女三の宮の出家、源氏の出家決意に至る軌

紫の上の人間像について — 第一部から第二部への変貌をめぐつて —

跡が、第二部の物語の終焉を告げるのである。

ここで、紫の上の悲劇に焦点をしばつて考察したい。

女三の宮の六条院降嫁事件が、紫の上にとつてなぜあのように決定的とも言える衝撃を与えたのか。この事件をめぐる紫の上の悲劇は、一面から見れば、先行の明石の上や朝顔と源氏との三角關係によつて描かれた嫉妬物語の世界の延長線に過ぎないともいえる。確かに、客観的な情況の変化は考慮に入れなくてはならない。明石の上や朝顔の場合とちがつて、女三の宮の件は朱雀院からの懇請によるという背景をもち、また六条院において占めていた紫の上の立場・身分や年令の問題があつて、以前とは比較にならない重さがこの結婚問題にはかかつている。源氏の身分や地位、年令の問題もそれらとからんで、軽るくしく連ばれるものでないことは、「若菜」上巻始発部の諸人物の思惟の深さを物語る長大な会話の累積をみて、明白に了解される。紫の上の嫉妬物語のヴァリエーションとしての側面は否むことができない。殊に、「朝顔」巻との主題の連関が見られることは、私もさきに触れた。

問題は、紫の上の苦惱の世界を、その内側から見つめ直そうとする作者の視座と文体の変化にあると言えようが、そこには紫の上の造型にかけた作者の新たな主題を読みとることもできる。紫の上の人間像は、女三の宮降嫁を契機に、質的に変換しはじめている。

くり返すことにもなるが、源氏と女三の宮の結婚が一種の義務履行で、「おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず。塞がるべき方なきもの」(若菜上)であることは、紫の上も知っていた。だから、むやみな嫉妬は世間のもの笑いの種となるだけで、この事態は

紫の上のとりが堪え忍ぶことによつてのみ円満に解結されるものがあることを、紫の上自身よく悟つていたのである。彼女はそれとおりに身を処した。しかし、いかに正当づけられ、公認されたものであつても、その結婚が、所詮は源氏の色好みによつて実現したものであることもまた紫の上にはわかつており、むしろそれが正当化され、公認された色好みであればあるほど、紫の上の不安と苦惱は深刻化したのである。この結婚を黙つて承認するか否かは、源氏の色好みの正当性を認めるか否かに直結する問題であつて、紫の上にとつては苛酷なこの問いかけを与えた作者の意図は、重大である。なぜなら、源氏と紫の上は、第一部において描かれたごとく、理想的な夫婦だつたから。明石の上や朝顔の場合において留意すべきは、源氏との関係はあくまで非公認の、その意味で源氏が紫の上に対して遠慮しなければならぬ要因を含んだ交渉として成立してゐた。

紫の上の嫉妬心が発動する原因もまた、そこにあつた。が、女三の宮の場合は、はじめから紫の上の嫉妬は封じられてゐるのであるから、彼女の不安や苦惱は内向的に深化する以外にその赴くところをもたない。紫の上の悲劇とは、こうした情況を指しているのである。作者が、紫の上の内界に刻まれるこのような悲劇的心理を奥深く追求する理由は、理想の色好み光源氏を相対化し得る人物としての新たな紫の上像の造型を試みようとする意図に由来する。それは、かつては理想的配偶者としてほとんど偶像化されてゐた紫の上を、非理想化し、人間化する方法とも言えるのだが、紫の上像におけるそのような人間性の追求は、物語世界の情況の推移に伴う人物像の変貌の問題という以上に、主題の進展そのものにより重要な関わり

をもつものと考えるべきである。すなわち、紫の上の内部に宿る不安や嫉妬、苦惱や悲哀を通して、人間存在そのものの根源的な弱さや不安を正視し、そこからの救済の方途を探らうとする作者の新たな主題が始まつたのである。そのような人間性の深部は、その人物を非人間化するような極限情況の中でこそ露呈するのであつて、愛不在の結婚が正当化される源氏と女三の宮の関係は、そうした非人間的情況設定としてのひとつの典型であろう。そして、そのような情況に対して反問し苦惱する紫の上もまた、新たな主題のない手として変貌させられたのである。

第二部での紫の上の特徴的なのは、女三の宮の降嫁をめぐつて深まる不安や苦惱が、単に一時的な感情の動揺を示す段階をこえて、さらに敵愾な無常観ないし宗教的思惟にまで高まつてゐる点である。「若菜」下巻に入つてくり返し叙せられる紫の上の出家志願のことが、彼女の源氏に対する不信感に発したものであることは言うまでもないが、さらに「この世は、かばかりと、見果てつる心ちする」(若菜下)「まめやかに、いと、行くさき少なき心ちする」(同)という、諦念にも近い宗教的観念に達するとき、彼女と源氏との精神的断絶は、もはや決定的と言ふべきである。源氏は彼女の出家を許さず、「なほ、思ふさま殊なる心のほどを、見果て給へ」と慰め、現実世俗での紫の上と源氏との愛の絆は、ついに断たれることはなかつた。紫の上は、死に至るまで、源氏の妻として彼の愛の虚偽を疑視し続ける同伴者でなければならなかつたわけで、彼岸にある魂の救済を志向しながら、此岸としての現実世俗の矛盾の中に生身をおいて生き続ける紫の上の姿にこそ、人間存在の根源的な不安と罪障

を正視しながら、その救済の方途を求め続ける、作者の宗教思想の具象化と見る事ができるのである。この意味において、紫の上の悲劇世界の深刻さは、まさに作者の人間認識の深さ、人間追求の確かさと等価のものであり、人間と宗教との関わりを考究する最初の課題をになうものなのである。このような主題意識が、後の宇治十帖における大君や浮舟の造型にそのまま引きつがれていることは、もはや多言するまでもなからう。

顕著に人間性を賦与されて変貌した紫の上が、聡明な理性と自己抑制によって女三の宮との円満な関係を維持するところ、源氏の正室としての理想性はいっそう確固たるものではある。しかし、その理想性は第一部におけるそれとは異質のものである。第一部においては、藤壺の形代として梓づけられた紫の上の人間像は、源氏の色好み世界の形成に参与する理想の配偶者としての位置と使命を超越することはなかったが、第二部においてはむしろ、源氏の色好み世界の局外者たらざるを得ない位置におしやられる状況の中で、六条院の内部崩壊と源氏の色好みのモラルの解体(4)の証人として、その理想性が強調されるのである。いわば、古代物語的理想性の問い直しによって作者が新たに造型した人格的理想性への変貌を、それは意味してしよう。それは、人間をその内部からとらえて生の根底に宿る不安と苦悩を浮き彫りする方法への転換とあいまって、物語の主題そのものの変革にまで結びついている。

ただ、紫の上造型におけるこのような変化は、「若菜」上巻に入って、突如として生じたものではない。紫の上の人間像における人間性追求の主題は、すでに「若紫」巻で明石の上の登場を絡ませた

紫の上の人間像について — 第一部から第二部への変貌をめぐって —

とき、萌芽として作者の構想には兆していた。が、第一部の物語においてその萌芽はついに成長も開花もせず、その主題展開は不徹底に終わっている。その理由はおそらく、物語世界における藤壺の存在の重大さによるもので、藤壺の死を描く「薄雲」巻あたりまで、紫の上造型には、主題的にも方法的にも大きな制約があったのであろう。作者が紫の上造型にかけたいまひとつの主題を本格的に深めるのは、それ以降の物語の重大な節目を得る時点でまで待たねばならなかったのである。

このように見てくれば、作者が紫の上の造型に意図した主題と方法が、第一部から第二部への長大な構想のもとに周到な用意で深められていく様相が読みとられるのである。紫の上の人間像における理想性の問題、その変貌の問題には、源氏物語全篇の主題と構想の中心的な課題が重くかけられていて、にわかに結論を導き出すことは慎まれるが、作者がこのヒロインの造型に非常な情熱を傾けたことは、あらためて認められるべきであらう。

注(1)通説では「若紫」の意とするが、萩谷朴氏は「我が紫」の意

とされる。同氏「紫式部日記全注釈」(角川書店刊)参照

(2)この巻から、「うへ」の呼称がしきりに用いられる。

(3)松尾隠氏「紫上一一つのやゝ奇矯なる試論」(「解釈と鑑賞」昭24・8)

(4)秋山虔氏「紫の上の初期について」、「紫上の変貌」(「源氏物語の世界」東京大学出版会刊所収、昭39・12)

(5)石田穰二氏「紫の上」(古典鑑賞講座「源氏物語」角川書店)

刊所収、昭32・12)、伊藤博氏「紫上」(「国文学」昭43・5)、今井源衛氏「紫上」(源氏物語講座第三卷、昭46・7)ほか。

(6) 日本古典文学全集「源氏物語」(阿部秋生、秋山虔、今井源衛氏校注)頭注、玉上琢弥氏「若紫」(「源氏物語講座」第三卷)参照。

(7) 阿部秋生氏「明石の君の周囲」(「源氏物語研究序説」第二篇第二章、昭34・4)

(8) 大朝雄二氏「紫上論をめぐって」(「源氏物語正篇の研究」昭50・10 桜楓社刊所収)

なお、大朝氏は「若紫」巻執筆の時点で、後の「若菜」上巻以降で語られる女三宮の六条院降嫁事件まで、作者の構想圈内に入っていたと説いておられるが、私見では賛同し難い。

(9) 日本古典文学大系「源氏物語二」(山岸徳平氏校注)、日本古典全書「源氏物語二」(池田龜鑑氏校注)、日本古典文学全集「源氏物語二」(阿部秋生、秋山虔、今井源衛氏校注)ほか。

(10) 源氏物語成立論において、「若紫」巻起筆説もあり、玉上琢弥氏「若紫」(「源氏物語講座」第三卷有精堂刊)もこの点にふれてあって示唆深い。

(11) 作者は、紫の上を源氏の正妻格に据えるために、注意深く周到な用意で情況整理を進めてきており、例えば、「葵」巻結末部で、臘月夜や六条御息所を源氏から遠ざけようとする構想をあらわにしている。続く「賢木」巻で、御息所の伊勢

下向を語り、藤壺の出家を描くのも、そうした構想の具体化としてとらえることができる。紫の上の対抗者たり得る女性を、相互に対立確執の場に置かないで、しかも紫の上を優位に保つ作業は、第一部においてのみならず、第二部にまで及んでいることに注意したい。

(12) 女三の宮は藤壺の姪に当る。源氏が宮を迎えて、かつて同じ素姓に出る紫の上をはじめて迎えたときのことを回想する心情が、いまの紫の上に伝わってきている描写(若菜上巻)に注意したい。

(13) 藤村潔氏「紫上の創造―物語作者の悲劇」(「源氏物語の構造」桜楓社刊所収、昭41・11)参照。

(14) 野村精一氏「若菜巻試論―人間関係の悲劇的構造について―」(「源氏物語の創造」桜楓社刊所収、昭44・9)

なお、本文の引用は古典文学大系本に拠った。
(本稿は、昭和五十三年十一月十八日の広島大学国語国文学会での口頭発表「紫上造型の主題と方法」の内容と多少重複した部分があることをお断わりする。)